

所 陵

ISSNO 0913-1906

No.17

関西大学考古学等資料室彙報

昭和63年 6 月30日発行



軒丸瓦（朝鮮民主主義人民共和国平壤附近出土）

目 次

祇園精舎跡（サハート遺跡）第2次発掘調査の概要……………	2
祇園精舎遺跡調査の先覚者たち……………	5
インド彫刻における人間の原像……………	6
サザキ神と対馬……………	8
大韓民国「国史館」を訪ねて……………	10
殷墟出土資料（甲骨文字・白陶土器）について……………	12
昭和62年度調査報告「福岡・熊本」地方の遺跡……………	14
資料室行事等……………	16

祇園精舎跡(サヘート遺跡)第2次発掘調査の概要

網 干 善 教

I

関西大学創立100周年記念事業として実施する関西大学とインド国政府(Archaeological Survey of India)との日・印共同学術調査によるサヘート(Saheth)遺跡《祇園精舎跡》第3次調査(第2次発掘調査)は1987年10月8日出国し、1988年3月24日帰国するまでの約5ヶ月半にわたって現地調査を行った。

遺跡地はインドの首都ニューデリーの東方約600Km、ネパール国との国境に近いウツタル・バラデッシュ州パハライチ(県)シュラヴァスティ(市)にあって、約10万 m^2 の範囲が重要歴史遺跡地(Immense Historical Importance - The Auciet Monuments and Archaeological Site and Remains Act)として保護されている。この遺跡は祇園精舎とされており、わが国では『平家物語』や『今昔物語集』にもその名が見え、よく知られると共に、釈迦八大遺跡に挙げられ、仏教の原点として重要であることはいうまでもない。

II

1978年10月26日より第1次調査に引続いて地形測量を行った。従来この遺跡については、コンターラインのない単なる平面図があるのみで、こ

れもかなり以前に製作され、現状と異なり、改めて地形図を製作する必要があった。第1次調査では主として南地区の発掘区を中心に行ったが、今回は遺跡全域について実施した。25cmコンターで、原図200分の1である。この地形図の完成によって遺跡地内の現状を把握することができるようになった。

また、第1次発掘調査で出土した多量の遺物の整理や実測図の作成などの作業もこれと併行して実施した。

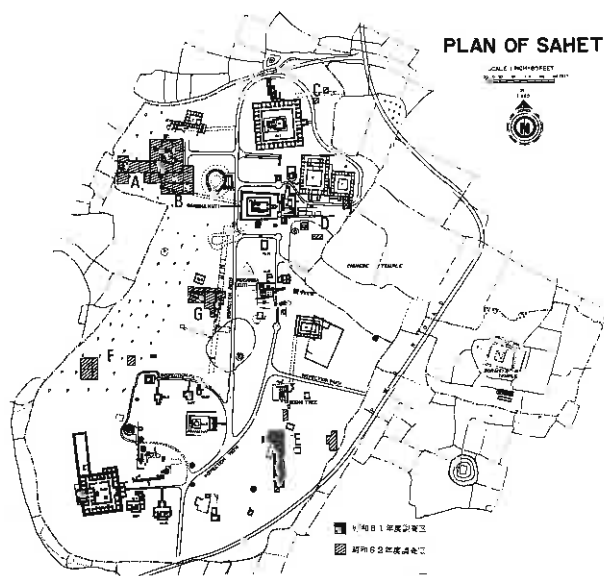
III

第2次発掘調査作業は11月25日より開始した。各発掘地区の概要は次の如くである。(A・B・Cの地区の表示は第2次調査で便宜的に付した記号である。)

(1)A地区 遺跡保存地区内の西北端の一画である。ここでは第1次発掘調査での試掘によってレンガ積み構造物の遺存が判明したが、調査日程等の都合により拡張を行わず、第2次調査で実施することにした。そこで今回はこの構造、規模、性格などを解明するために発掘作業を行った。

結論的にいうならば、このレンガ積みの構造物は紀元1世紀頃、すなわちクシャーン朝頃と推定される時期に築造された沐浴池であることが判明した。そして、この沐浴池は遺構の状況からみて、恐らくグプタ朝にはその機能を失ったのではないかと考えられる。

さて沐浴池の構造は西辺では全長22m、上下2段のレンガ敷となっている。上段はレンガ18段を積み、その高さは約94m、その下に約幅1.25mのテラス状のレンガ敷きがあり、下段は42段のレンガを積む。その高さは約2.4mあって、最下段には加工した木材を置いている。西辺中央にはレンガ3枚を重ねた高さの7段の階段が設置され、さらにその最下段より池の中に向かってスロープをなした施設がある。なお、このスロープの施設の最上段はレンガを縦に置いている。このレンガが倒壊しないように両側に杭状のものを打込み木材を構位置に置いて固定している状況を確認することができた。このように沐浴池の構造の細部まで検出したのは稀有の例であるといえよう。



サヘート遺跡発掘地区図

東西辺すなわち北辺は西辺と若干異なる。その状況は、地形全体が東高西低であるため、東辺は3段のレンガ積みとなっているが、崩壊がひどく明確ではないが原則として3段構造となっている。一辺の長さは約27mで、西辺よりやや長い。

階段は西辺が中央1ヶ所であったのに対し、北辺では西側と東側の2ヶ所に設けられている。構造的には西辺中央の階段と同様である。

池の中は全面発掘していないが、かなりの土器が遺存している。なかでもコブラを模した土製の蛇口が出土したことは興味深い。

なお今回調査できなかった東辺の南の部分と、南辺については次回の第3次調査で確かめたい。



A 地区貯水池西側階段（沐浴池）

(2)B 地区 沐浴池の遺存したA地区の東に続く地区である。19世紀の中頃、A・カニンガム、W・ホーエイ、J・フォーゲル氏らによって一部試掘され、復原された井戸跡や僧院と思われるレンガ壁が若干露出している状態であった。今回は西側の沐浴池との関連もあって、この地区を設定し、東西40m、南北50mの範囲を全面発掘することにした。

その結果B地区ではレンチ南半において東西約19.5m、南北約20m、高さ約60~70cmのレンガ敷きのスツーパーを検出、この仏塔を中心にモナストリ（僧院）の遺構が遺存することを確認した。

まずスツーパーはほぼ正方形のレンガ積みの基壇の上に数居屋状の構造物がある。そしてその内部にレンガ積み3段程度残る一辺約10mの方形段をつくる。さらにその内部に内接する円形状に敷きつめたレンガ敷があり、一部レンガの抜取られたところを観察すること5段程度のレンガ敷きとなっている。

仏塔遺構の上層はレンガ片が約1.5m以上にわたって埋っている。その南の部分からは等身倍、

等身、半等身大のテラコッタの仏像片が多量に出土した。この状況からみて仏塔の基壇から上部は破壊されているものと考えてよい。また、焼土や焼木片も出土しているから、仏塔の周辺部に木造の施設があったものとする。

この仏塔基壇下には仏塔造頭以前のレンガ壁などの構造物がみられる。こうした状況から仏塔建立以前は僧院状の建物があったと推定できる。仏塔が建てられた時期はレンガのサイズや出土遺物からみてAD 4~5世紀頃のグプタ朝と考えてよい。しかし、その後も部分的に増改築が施されている痕跡が認められる。

仏塔の西側沐浴池との間及び北側において僧院遺構を検出した。ただ東及び南側にも遺存するが今回は発掘面積がすくない。

僧院跡は原則として東西、南北方向のレンガ壁とレンガを敷いたフローアであるが、増改築が繰返されており、上下に重複し、交錯しているからまとまった規模、構造を見極めることは至難であった。仏塔との層位的関係からグプタ朝のものが上層にあり、下層にはAD 1世紀頃のクシャーン朝、さらに下層にはBC 2世紀頃のシュンガ朝期のものが遺存している。

この僧院跡からは多量の土器のほか奉獻塔の相輪、石製で蓮華文の彫刻のある欄楯、他に印章、貨幣など多くの遺物が出土した。



A・B地区全景（気球からの写真）

(3)F 地区（西地区） 遺跡地の西端部にあるNo 7寺院跡に隣接する地点を層位観察のため試掘した。ところが地表下約2mの位置で井戸跡を検出した。この井戸跡は直径6m、円形にレンガを縦位置に2段を置いて外周縁とし、その内部にレンガ敷の床面をつくっている。そして、その中央に内径2mの井戸が掘られている。井戸枠に相当するものはレンガを小口積にして積み上げたもので、上端



E地区全景（僧院跡）

から約4mで地下水に達し、現在でも豊富な水が湧き出ている。時期的にはグプタ朝期の構築と考えてよい。

井戸跡の検出によって地山層までの発掘が出来なくなったため、その西方約40mの地点、保存地区の最西端に近いところで試掘することにした。ここでも遺存状況の良いクシャーン朝からポストグプタ朝にいたる各期の建築群を検出した。そのためこの地区を拡張して発掘を行ったところ、トレンチの中央部で東西約7m、南北約6.5mの寺院跡とそれをめぐる広場、3室以上の僧院などを検出した。

ここでも経年的に増改築が行われており、複雑な様相があった。

(4)G地区（中央地区） 遺跡のほぼ中央の状況を把握するためすでに調査され、一部地表に現れているNo13寺院跡とその東側で発掘調査した。

ここでは地表下約2mの位置で一辺約14m以上の規模をもつレンガ敷遺構を検出した。レンガの敷き方は長方形のレンガを縦、横方向に交互に敷き詰めたもので、部分的には2段に重ねている。北端には約1.8mの等間隔の柱穴があった。東端にはこのレンガ敷と一部を共有する一辺3.5m以上のレンガ敷も遺存した。

次にこの遺構の南側で層位的には上層にあたる場所に東西2.8m、南北2.7m、西に口を開くコの字形の小寺院跡、さらにその南側で再利用レンガを用いた直径約3.3mの奉獻塔を検出した。これは2度にわたって増改築が行われていることが判明したが、塔の中心部は未発掘である。

なお、最上層のNo13寺院跡は東西10.5m南北8.3mの平面で、東側には東西3.6m、南北4.6mの区画が張り出している。全体として3回にわたる増改築が行われている。

(5)C地区（北地区） D地区、E地区（南地区）

遺跡地の東、南、北地区でそれぞれ層位研究のためのトレンチを設定し、試掘した。各トレンチでは地層の堆積状況と遺構の関係、層位的に検出した土器やその他の遺物を発掘し、良好な資料を得たものと思う。

特に地形の高い南地区では地表下約7mに至ってやっと無遺物層に到達するような状況であった。これらの相互関係は遺物の整理にまたなければならない。

IV

第3次調査によって出土した遺物は概ね次の通りである。

主な遺物

仏像片	約20点（仏頭片3・胴部片2・脚部片1）
テラコッタ	約200点（動物100・人物100）
印章	約20点
貨幣	約20点（図柄が判明できるものは数点のみ）
玉類	約300点（石製・土製・ガラス製・石材はめのう・玉すい）
腕輪・指輪	約100点（ガラス製・土製・銅製）
その他	約300点（鉄製品・銅製品・石製神像・土製仏足名等）

土器類

土器破片	約10万点
器形の判明するもの	約5万点
実測を必要とするもの	約1万点

V

第2次発掘調査は3625m²（145Qd）であった。遺跡全体からみれば甚少であるかも知れないが、各発掘区において重要な遺構なり、遺物の出土があった。なかでも大規模な沐浴池、仏塔、奉獻塔、僧院遺構や仏頭、欄楯など年代判定の礎となる遺物を検出した。その結果、遺跡はシュンガ、クシャーン、グプタ、ポストグプタ朝期と長期間にわたって存続したものであり、遺構、遺物から判断して、この遺跡こそ文献にみえる舎衛国祇樹給孤獨園跡であろうという確信を深めることができたと思う。

祇園精舎遺跡調査の先覚者たち

米 田 文 孝

1 はじめに

関西大学は創立百周年記念事業の一環として、インド共和国 U.P. 州サヘート遺跡（シュラーヴァステイー＝祇園精舎遺跡）において日・印共同学術調査を実施している。調査は1985年度より開始され、1988年度まで継続して実施される予定である。考古学的な発掘調査は史跡指定地域内の未調査地区を中心に実施され、その成果については後日刊行予定の正式報告書で、文献・建築・地理・美術分野などの成果をも総合して詳述されよう。

ところで、遺跡内には調査され、復原・整備を終えた寺院・僧院などの諸遺構が多数あり、公園局により維持・管理が行われているが、これらは正しく祇園精舎遺跡をめぐる先覚者たちの軌跡を物語るものである。

小文は当遺跡に注目、主として考古学的調査を進めた研究者たちの業績を紹介し、併せてイギリス東洋学内で大きな位置を占めるインド学発展の流れの中で、彼らの残した航跡を遡行してみたい。

2 A. カニンガム

祇園精舎遺跡に着目し、最初の調査を実施したのは、アレキサンダー・カニンガム（Alexander Cunningham; 1814～93）である。ここで彼の祇園精舎遺跡をめぐる具体的な調査成果を述べる前に、略歴を紹介しておこう。

カニンガムは1814年1月23日、スコットランド人の詩人であったアラン・カニンガム（Allan Cunningham）の二男として誕生した。ロンドンで初等教育を終えた後、機械専門学校を経てセント州チャタムの英国陸軍工兵隊に入隊した。

1831年ベンガル工兵隊少尉に任官され、33年6月着任、インドの大地にその小さいが大きな第一歩を印した。その後、職業軍人としては1860年6月16日付で大佐に、翌61年6月30日付で少将に昇進するとともに、准男爵に叙せられた。

この間、1836年7月～40年1月までインド総督オークランド（Auckland）卿付武官を勤めた他、軍務と兼任して、総督府の公共事業部門の各種役職に任ぜられた。また、40年3月30日には化学者マーティン・ウィシュの娘マリシア・マリア・ウィシュ（Alicia Maria Whish）と結婚している。

1861年12月1日付でインド総督府（総督キャンニング〔Canning〕卿）より考古局（Archaeological Sur-



PL.1 A. カニンガム “The Story of Indian Archaeology 1784～1947 PL. IV より”

vey of India) 考古学調査官 (Archaeological Surveyor) に任命され、65年末まで精力的に踏査を中心とした考古学的調査を実施した。

ところが、65年をもって総督府（総督ローレンス〔Lawrence〕卿）は考古局を廃止したので、翌66年2月9日帰国し、70年までデリー・ロンドン銀行の取締役を務めた。

1870年、英本国インド省大臣アーガイル（Argyll）卿の提言によりインド総督メイヨー（Mayo）が考古局の復活を決定し、その初代長官に1871年1月1日付でカニンガムが任命された。翌71年2月、彼はインドに帰るや否や考古局を再建、補佐官を任命して、以前に増して精力的かつ組織的な調査を推進した。この考古局創設と廃止、再興の経緯については後述したい。

1885年9月、彼は考古局長官を退職したが、インド滞在は都合47年間の長きにわたった。帰国後、1893年11月28日に死去するまでの間は、ロンドンで長官時代に携わった調査の報告書執筆・編集に没頭した。この間、1871年5月20日インド星勲爵士、78年1月インド帝国勲爵士、87年3月21日インド帝国上級勲爵士に叙せられている。

以上のように、カニンガムのインド滞在は前期（1833年～66年）、後期（1871年～85年）の二期に分けられるが、次に各期ごとの考古学的調査の歩みについて記してゆこう。

（未完、引用・参考文献は巻末）

インド彫刻における人間の原像

山岡泰造

古代インドの統一は、マガダ国のマウリア王朝によって達成されたといえるが、特に三代目のアショカ王によって半島の南端部を除くインド全域がその版図に入る大帝国が成立した。これは中国における秦の始皇帝の統一に比せられるべきもので、統一後の崩壊の急速な点も両者に共通である。

マウリア王朝期になって、ヤクシヤ・ヤクシー（葉叉・葉叉女神）と呼ばれる男女像の彫刻が出現するが、これは極めて写実的でしかも大型（等身大あるいはそれ以上）であるという点に特色がある。ヤクシヤ・ヤクシーの出現以前から地母神と呼ばれるテラコッタの小像がインド各地でつくられているが、これらは小さいうえにグロテスクな容貌・体軀をもつのが通例で、それだけに却って、ヤクシヤ・ヤクシーと呼ばれる大型でしかも極めて洗練された表現技術をもった男女の彫刻が、何の前ぶれもなしに突如として出現したことは、驚異ともいえる出来事である。

これは、秦の始皇帝陵から出土した兵馬俑や、御者つき四頭立馬車について感じることに同じである。それまで中国には写実的でしなやかで大型の人物像はなかったのに、何故このように突然しかも完成された技法・表現をもつものが成立するのか、このような疑問はヤクシヤ・ヤクシーについても同様に生じるのである。

勿論、マウリア朝の場合、ダリウス一世（BC

553-486）によって形成されたアケメネス朝ペルシアという世界帝国がその先例として存在するという条件もある。パトナの美術館にいくつか陳列されているマウリア朝のテラコッタの女性小像は通例の地母神



① ディーダルガンのヤクシー（パトナ出土・紀元前3-2世紀）

とは違ってかなり大きい上に、コート・レディともいべき優雅さがあり、ギリシアのタナグラ人形に近い。これらは疑いなくアケメネス朝の影響であろう。また美しい動物像の柱頭をもつアショカ王柱やパトナ出土のディーダルガンジュのヤクシーなどにみられるチュナールの砂岩を磨き上げた洗練された技法もペルシアのものであろう。しかしヤクシヤ・ヤクシーの堂々たる体軀（男性は肩幅が広く腹をつき出し、女性は胸と腰を大きく張り出す）は疑いなくインド独自のものであり、しかもそれをモニュメンタルに表現しているのである。この点も中国人そのものの表現である秦の始皇帝の兵馬俑と同様である。

いったいこのような彫刻は何故出現したのか、ヤクシヤ・ヤクシーと呼ばれているものは果して神像なのかといった疑問が生ずるが、更に彫刻とは一体何なのか、何故成立したのかということも問題としなければならないように思う。

マウリア王朝と秦の始皇帝の場合、写実的で大型で成熟した表現をもつ彫刻の突然の出現は、明らかに統一国家の成立と関係している。しかもその民族にとっては初めての統一国家である。兵馬俑が始皇帝の軍隊そのものの忠実な再現であるように、マウリア朝の男女像もアショカ王の臣下としての人間であろう。例えば拂子（^{ボウ}）を持っている場合がある点からしてもこれらは神というより人間であり王の臣下（あるいは神に仕えるもの）としての人間である。それは絶対君主（あるいは神）の侍者にふさわしいように堂々たる容貌と体軀をもった理想的な人間像でなければならぬ。

一般に、呪術的な意味をもつ地母神などと違って、古代の統一国家成立期に出現する大型の写実的な人間像の彫刻は、エジプトの場合もメソポタミアの場合も、ギリシア・アルカイック期のいわゆるクーロス・コレーの男女像も、始皇帝の兵馬俑もマウリア王朝のヤクシヤ・ヤクシーと同様、神像と考えるよりも、各民族の統一の気運に対応する、その民族の理想の人間像、いわば各民族の原像と見る方がよいのではないだろうか。だいたい神々にしても君主にしても、それらが本当に力をもっている時には、真に人々にとって畏怖すべきものである時には、つまり神々や君主が生きている時には、姿は見えないもきであろう。従って神像や君主の肖像が出現するということは、人々が何らかの意図をもって神々や君主を利用する場

合であろう。神々がほんとうに生きている時には神像はないのが当然である。神像はいわば神々の矮小化である。神々にせよ君主にせよ、これを彫像として、人間像として表現するということは、人間のかたちの中に神性や君主の権威を宿らせることであり、それは偶像である。偶像が成立するためには、やどるべき場所、つまり人体の像がそれに先立って成立していなければならない。つまり各民族にとっての基本的な人間像つまりその民族の原像というべきものがまず成立していて、それに神性なり君主の権威を宿らせるのでなければならない。そのような人間の意図が原像に加えられることによって、原像の迫力がそれだけ減少するのは止むを得ない。原像は神の眼あるいは絶対君主の眼から見た人間像である。それに人間の意図あるいは精神による細工が加えられれば、原像の物的存在感は弱まる。インドの場合、クシャナ王朝のカニシカ王のころに仏教が成立したが、それは仏陀自身の生きた記憶が失われ、その教えや思想がひとり歩きを始めた時代であった。いわゆる大乘仏教の成立期である。それまでは、つまり仏陀の生きた姿やなまの声の人が人の心の中にある間は、仏陀の像はなかった。インド人ならざる遊牧民月氏族の中にも仏陀の教えが理論として入って行き、その理論の確立者の姿を理論の象徴として欲したとき、彼らはギリシアの神々の姿（あるいはヘレニズム世界の人間像）を借りてそれを表現したのである。すなわちガンダーラの仏像である。一方、インドのマトウラーでもほぼ時を同じ



② ヤクシャ
(カルカッタ美術館・紀元前2世紀)

くしてインド的な仏像が出現した。マトウラーはマウリア王朝の版図を縮小しながら受けついでシュンガ王朝の西の端にあたり、クシャナ朝では北の都（夏の都）ベシャワールに対する南の都（冬の都）



③ ヤクシー
(カルカッタ美術館・紀元前2世紀)

であった。ここには仏像成立以前からマウリア王朝以来の造像の伝統があり、いわゆるヤクシャ・ヤクシーにおいてインドの人間像が確立しており、それが直ちに仏像の表現に利用されたのである。それはマトウラー出土のいわゆるパールカムのヤクシャ（シュンガ朝・紀元前二世紀）と、菩薩立像（クシャナ朝・二世紀）を比べれば一目瞭然である。

彫刻は物である。それは人間の精神に対立あるいは先行するものとして、神の造ったものである。人間の歴史は精神の歴史であり、もっぱら見る人間の立場からの歴史である。それに先立って神の眼からみた人間の像がまず造られているのである。日本の埴輪の人物像成立についても、同じようなことが考えられるかも知れない。

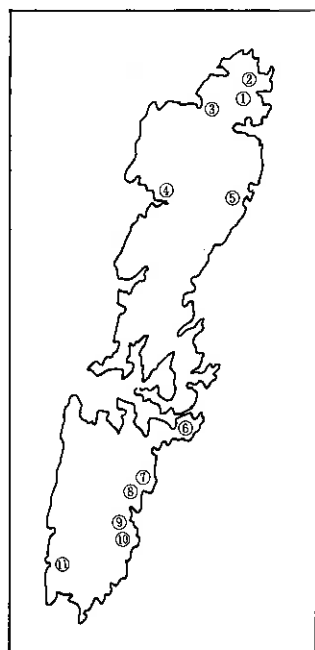


④ パールカムのヤクシャ
(マトウラーナ出土・紀元前2世紀)

サザキ神と対馬

上井久義

対馬の神社について記したものに『対州神社誌』がある。これは宗義真の発意によって、対馬八郡の役人に申し付け、各神社の来歴を記した記録や云い伝えを報告させ、これを加納貞清が編纂したものであることが、その貞享2（1685）年の奥書によってわかる。近世も初期における在地神社の実態を報告したものとして興味深い史料である。近世における代表的な神社は、上対馬の木坂と、下対馬の厳原にある八幡神社である。その他に熊野権現とか住吉大明神や夷の名が見える。ほとんどが漢字で標記されているが、わずかの神社に関しては、ひらかなで記されている。おそらくどのような文字をあてるのか不明になってしまった神社群であったと思われる。各集落でもすでに名称の意味がわからなくなっていたのであろう。このなかで、注意をひくものに「しゞき」とか「さゞき」と称する神社がある。村によって多少の違いはあるが、同じ名称であったと考えられる。『対州神社誌』の記載順にしたがって例記してみよう。対馬には、これに続いて藤斎長が宝暦10（1760）年に作成した『対馬国大小神社帳』と、斎長の長子である藤仲郷が天明年間に編纂した『対馬州神社大帳』がある。これらがどのように標記しているかを知るには、鈴木棠三著の『対馬



対馬・サザキ神の分布図

の神道』所収の『対州神社誌』とその注記によればよい。藤斎長の考証をA、藤仲郷の考証をBとし、読みの付されたものはこれも添記しておくことにする。

- ①比田勝村。しゞき殿。神体は高さ5寸の石。Aなし。B志々岐。
- ②西泊村。しゞき殿。神体は鏡4面。A志々岐。B志々岐（シジキ）。
- ③佐須奈村。さゞき殿。神体は高さ6寸の石。A

- 佐々伊（サマイ）。B鷓鴣（ササキ）。
- ④犬ヶ浦村。さゞい神。神体は石。A犬浦鷓鴣神社（サマビ）。B鷓鴣社（サゞキ）。
- ⑤足見村。七騎七郎殿。社なし。A志々岐社。B志々岐社。
- ⑥尾方浦村。しゞき七郎殿。神体は幣。Aなし。B志々岐社。
- ⑦根緒村。しゞき七駄。神体は石。Aなし。B志々岐社。
- ⑧小浦村。しゞき。神体は石。Aなし。B志々岐社。
- ⑨久田村。しゞき大明神。神体は不明。A久田志々岐神社（シシキ）。B志々岐神社。
- ⑩尾浦村。しゞき殿。Aなし。B志々岐社。
- ⑪醴豆郡瀬村。しゞき七郎殿。Aなし。B志々岐。

対馬以外の地域では耳にしない社名である。また島全域に分布するところを見ると、ある特定の地名にかかわるものではなさそうである。意味が不明であったので、音のままで標記したのであろう。したがって、後になって様々な神が勧請され、新たな神名が付与される以前からこの地にあって村人の信仰を伝承してきた地元の神を祀る社であったと考えられる。

漢字をあてていながら読みを付した例が多いのは、音を重視したことによるのであろうが、これが三種の史料で異同がある。例えば③はササキ・サザイ・ササキ・④はササイ・サザビ・ササキ、⑨はシジキ・シシキとなっている。おそらく村人の表現にも多少の違いがあったものと思われる。藤斎長は、③に佐々伊の字をあて、④には鷓鴣の字をあてており、同じと思える神社名に異なる字をあてているのは、この文字に大きな意味を持たせていなかったことがわかる。しかし藤仲郷は、いずれも鷓鴣の字をあて、他は志々岐として区分している。しかし先の11例は、サザビ・サザキ・ササキ・シジキ・シシキなど、元来はおそらく同一名称で、鷓鴣にその意味があったのではないかと思われる。鷓鴣とは、ミソサザイの古名であるから、これらは鳥の名を持つ神社であったことになる。

サザキで思いおこされるのは、仁徳天皇の名前である。仁徳紀元年正月条によると、天皇が生まれる日に、木菟（ツク、みみずく）が産屋にとびこんだ。このことを武内宿禰に語ったところ、自分の妻も同じ日に出産し、このとき鷓鴣が産屋に

とびこんだと語った。これは吉祥であるというので、この鳥の名を相互に交換して子供に名付けたという話が納められている。木菟は奈良県生駒郡に勢力を持つ平郡氏の出身で、応神紀16年条によると、新羅との境におもむいて、葛城襲津彦の帰還を助けた人物である。

ミミズクは、多くの民族で霊鳥とされているがサザキもまた同じ様に見られていたのであろう。神代紀第八段の一書第六によると、大己貴神が出雲国の五十狭狹の小汀に行ったところ、少彦名命が葉草であるカガミの皮で造った舟にのり、サザキの羽根で造った衣を着て来訪したという。鳥の羽根の衣といえば、正倉院蔵の鳥毛立女屏風図を思わせる姿であり、これが葉草の舟にのって海の彼方から渡来する風景は、外来文化の色彩をまとった内容になっている。この神話の場合には、その浜の地名がイササであることと、ここへの漂着神の衣に音をかよわせて、イザサの衣をまとった神としたにすぎないのであろう。しかし古代人のイメージには、出雲の海岸にあるイササの地名から、こうした姿の神が漂着したと自然に語れる思想的な背景がひそんでいたことを示している。

対馬の場合には、イザサ殿とか、イザサ神としているから、地名ではない。したがって特定の地域に音がかよわなくても、イザサ神が存在したことになる。このことは、地名の説明説話としてだけでなく、イザサ神が信仰の対象として実在したことを示している。イザサ七郎殿という表現はむしろ人名に近いものである。七郎とか七鉢の名が付加された理由はわからないが、対馬には仁徳と同名の神を祀る社が11例あるともいえるのである。そして他地域にはこの伝承が見えない。

南西諸島では、鳥が屋内に飛び込むと、これは祖先が鳥の姿になって還ったと考える伝承がある。産屋に鳥がはいってきたというのも、あるいは家の後継者の誕生にさいして、祖先が象徴的な鳥になって現われたと考えたのかもしれない。少彦名神の場合は、鳥の姿をかりて漂着したことになるのであろう。また対馬では、サザキが産育の神とされている伝承もある。『対馬州神社大帳』によると、久田村のシジキ大明神を志々岐神社とし、「祭神豊玉姫、天忍人命。産生ヲ守神也。箒ヲ奉リ平産安全ヲ祈ル也。豊玉姫、葺不合尊ヲ産玉フ時箒ヲ以蟬ヲ除玉フ。又船ヲ守神也。」とある。これは後に『神社明細帳』でも「箒ヲ奉テ生産ヲ祈ルノ社ナリ。」とあり、また『津島紀事』でも「孕婦禱安産於此社、還願奉芒箒」とあるので、村人の伝承として生きていたことがわかる。

醴豆郡瀬村の場合は『対州神社誌』によると、



上県町佐護湊、天神多久頭魂神社境内には禁足地があり社殿はない。

石神寄神 神体無之。来歴不知。

一社ハ石ニ而取立。そとの内。西の小あさもと云浦ニ有之。

一神所横六間長サ壹町程之しげ也。

一十二月廿八日。給人数藤伊右衛門方々祭之。

一村之浜西脇に。しぎ七郎殿 御幣竹のしげ有。大方壹町角程。内ニ溝有。

とある。参考として『対馬州神社大帳』を付記すると、志々岐として「村之浜西脇。謂竹茂所也。壹町角程之茂也。」とある。

現在の地名は豆酸瀬で、西流する瀬川の南岸にあり、西へ約1キロで海岸の瀬浦にでる。小アサモは、この瀬川の川口付近の浦をさすのであろう。シジキ七郎殿は、村の浜の西脇にあるというから、石神寄神の西に続く位置になる。またシジキ七郎殿を石神寄神の項に含めて扱っているから、村人にとっては両社を合わせて一社とみて信仰の対象にしていたと思われる。また「そとの内」とは、神聖な区域を示すソトの内にあることを示す。シゲとは、村人の立ち入らない場所の「茂み」である。「御幣竹のしげ」とあるから、約100メートル四方の聖地に竹が茂り、神事のときにはこれを御幣に使ったのであろう。この聖なる竹林を、サザキと同系と思える名称でよんでいるのである。

聖なる竹林といえば、薩摩国アタ郡竹屋村で、竹屋守の女を児を生んだとき、ヘソノヲを切った竹で出来たという『風土記』逸文が思いおこされる。豆酸瀬の村人と相通ずる世界観が存在したものと考えられる。河口に近い浜に竹の聖林があり、その東に石神寄神を祀る石の社があり、これがソトの境域となり、その東に集落が存在したという小世界が形造られていた。そして久田村のシジキ大明神は箒を奉る産育の神とされている。対馬には、このような古代の神話的世界が永く伝承されていることを、サザキ神を通してうかがうことができるように思うのである。(この報告は文部省科学研究費による調査成果の一部である。)

大韓民国「国史館」を訪ねて

泉 澄 一

早いものでもう4年前のことになるが、昭和59年4月から10月まで、私はソウルにあった大韓民国国史編纂委員会へ日本学術振興会の韓国派遣研究者として留学していた。国史編纂委員会（以下「委員会」とする）とは日本でいえば東京大学史料編纂所にあたり、文教部（日本の文部省）の一機関で、大韓民国国史の編纂を任務としている。かつての朝鮮総督府や、その一部局であった朝鮮史編修会の所管した諸資料が戦後この委員会に引きつがれたのだが、その中に対馬藩に伝来した「宗家文書」（文書・記録類約6,500点のほか絵図・書簡など数万点）が含まれている。それは対馬の宗家文庫（厳原町万松院内にある）に保管される宗家文書のうち近世の日本・朝鮮交渉史に関する史料を、朝鮮史編修会が大正末～昭和初期に旧対馬藩主・宗家から買いあげたもの。量的には宗家文書全体の約4分の1ほどだが、近世日朝関係の根本史料だけに関係者の注目を集めている。

私は近世初～中期に釜山の倭館（対馬藩の居留地、外交・貿易の拠点であった）内にあった釜山窯の研究を進めていたが、在韓の宗家文書の調査が必須となり6か月の留学となった次第である。委員会では宗家文書を貴重史料に指定し非公開を原則とするが特別許可を得て必要な文書を調査できたのは幸いであった。

そのころ委員会はソウルの中心部・南山の麓（中区芸場洞）にあり、5分ほど歩けばソウル第一の繁華街・明洞である。明洞をぬけると新世界・ミッドパ・ロッテなどの百貨店があり、ロッテホテルのある乙支路まで歩いて20分ぐらい。私もときにこのコースを歩き、乙支路入口駅から地下鉄で宿舎（梨花女子大学の国際館）へ帰ることにしていた。委員会の隣には国土統一院があり、以前KBS（韓国放送公社）があった。タクシーに乗って「国史編纂委員会」といってもわかる運転手はまずいない。委員会の職員が「前のKBS放送の隣」といっているのを聞き、私もそうってタクシーに乗っていた。なにぶん市の中心部にあり便利だったが建物は古い小学校校舎の転用らしく、みるからに手狭だったし、資料の展示の際にも十分なスペースがなかった。むろん貴重資料の保管設備も不十分だったはずである。

たしか8月14日だったと思うが委員会では朝から机やイスをトラックで運び出し職員も忙しくしている。聞くと翌日（8月15日は国民の休日）

「国史館」の起工式があり全員「果川」行とのこと。かねて政府機関がソウル郊外・果川市の造成地に移ること、委員会はその一画に建設される「国史館」に入ることを聞いていたので、オリンピックに向けていよいよ政府計画が実施されるなあと考えた。また当時はソウル市内から約一時間かかる路線バスが唯一の交通機関だと聞き、これからは遠くなるなとも思った。しかし「果川」ばどのような所か、建設予定の「国史館」がどのようなものか見当もつけ難かった。

昨年正月、なん人かの委員会職員から年賀状が届いたが一様に新「国史館」のカラー写真が付しており、その全貌がはじめてわかった。むろん小さな写真だけではその規模・設備などわからないが、建物は朝鮮時代の建築様式を用い「国史館」とよぶにふさわしく、かなり想を練ったものと思った。3月になると委員会から国史館開設記念式典の案内が届き、委員会もとうとう果川へ移ったことを知った。

今年3月、3年ぶりにソウルを訪れはじめて国史館へ行った。地下鉄2・3号線の舎堂で降り、まだ整備中の所が多い広い道路を合乗りタクシーで約10分。周辺にはまだなにもない丘陵地の中に勿然と政庁都市が現われ、その一番奥まったと思われる所に瓦葺の屋根を模した2棟の建物・国史館がある。2棟とも地上3階・地下1階。前棟1号館は研究室棟、後ろの2号館は資料室棟といえる。中に入るとひろびろしていて、かえって使い勝手の悪そうな所もある。あいにも朴永錫委員長はハワイの国際会議に出張中だったが、知己の金厚卿資料管理室長が応待してくれた。

国史館すなわち委員会なのだが前とはうって変わって資料の保管に十分なスペースをとっている。たとえば「宗家文書」だが2号館三階の一室をその収蔵にあて、作業空間も十分にとってあった。私ははじめて委員会にある「宗家文書」の全貌を見たのだが、入口には「대마도증가문서」とハン글で表示があり、そこがかの「宗家文書」の保管場所だとは実は扉があくまで気がつかなかった。以前はカードで必要史料を探し係員に書庫から出してもらい閲覧していたのだが、数分間とはいえ全体を見すえながら、あれこれ文書を手にすることができたのは幸いであった。委員会では移転を機に「宗家文書」の目録を作成するとのこと、その準備もはじまった。対馬にある宗家文書（日

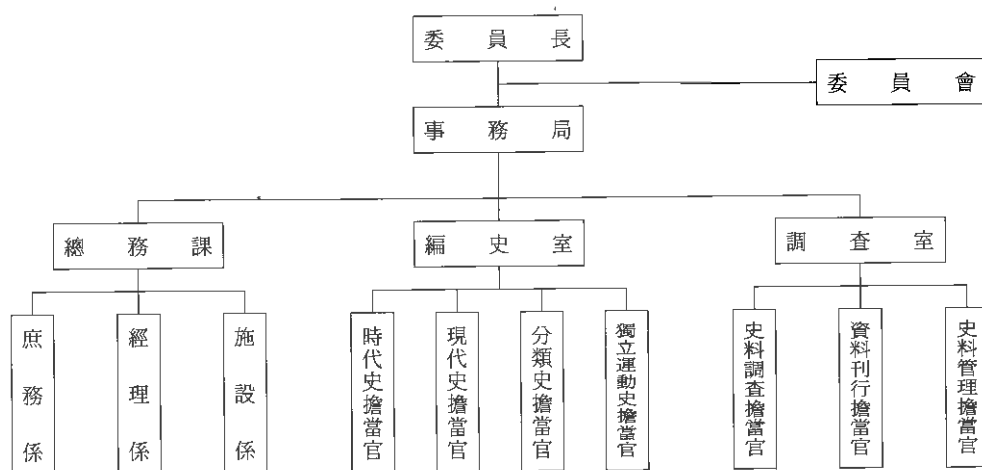


大韓民国 国史館全景

記・記録類、約45,00点）はあらかじめ整理を終え目録も出版されている。委員会のその目録ができれば近世日朝関係の研究にとって基礎が固まることになる。それが国史館の開設に伴うまことに意義ある仕事の一つになることはまちがいない。なお2号館1階の常設資料展示室では韓国古文書の歴史の変遷に関する展示が行なわれていた。これまた十分なスペースのもと貴重な史料が多く展示され楽しく見学できた。1号館には主として編史・資料調査の各研究室があるが組織そのものはソウルにあったときと大差はない。下に参考のため委員会の構成を掲げておく。

なお委員会職員は委員長以下三部門、計81名で構成されている。

これは余談だが洗面所で「HOT」の蛇口をひねったら湯が出てきたのには驚いた。前から知っている女子職員にそれをいったら「先生、南山では委員会も貧乏でしたが、いまは『兩班（ヤンバン金持ちを表わす）』になりました」と冗談をいった。外に出て改めて立派な国史館を仰ぎ見て、あれはうまい冗談だったなあ、とつくづく感心したことであった。



殷墟出土資料（甲骨文字・白陶土器片）について

角 田 芳 昭

本学に所蔵する中国関係資料は殷代（商代）の「刻字甲骨」「白陶土器」片から春秋時代の「銅剣・銅戈」漢代の「明器」唐代の「人俑」及び古代銭貨数百点であり、その資料価値は高く研究者が度々見学に訪れられる。

今回は殷代甘肅省出土（『本山考古室要録』・昭和10年）と記されている「白陶土器」片と「刻字甲骨」について考えてみたい。この資料は第2展示室の中国関係資料ケースの上段に展示しており、学内公開日の折、ある学生の見学者より質問を受け十分な説明が行なえなかったもので、後日調査しておきましょうと約束して1ケ年が経過した。この学生がいつ質問に現われるかと心にかかっていたので今回文献に目を通し紹介してみたい。

本学の「刻字甲骨」は22片であり、旧本山コレクションの一部をなすものである。

「甲骨文字」とは卜（うらない）の結果を亀甲獣骨に刻んで記録した殷代（商代）の文字であり、漢字の源となり、占に用いたので卜辞とも呼ばれる。殷代、神意は牛の肩胛骨や亀の腹甲の裏側に青銅の鑽（きり）で丸い穴をうがって焼き、表面に生ずる亀裂（この語もこれに由来）の状態で確認された。亀裂の状態が卜なる文字として象形化され、亀裂の際に発する音よりボクと発音された。そして殷王が神官（貞人）に占わせた結果を亀甲や獣骨に刻んで記録した。この甲骨文字の研究解読により中国古代社会の全貌が明らかとなり、

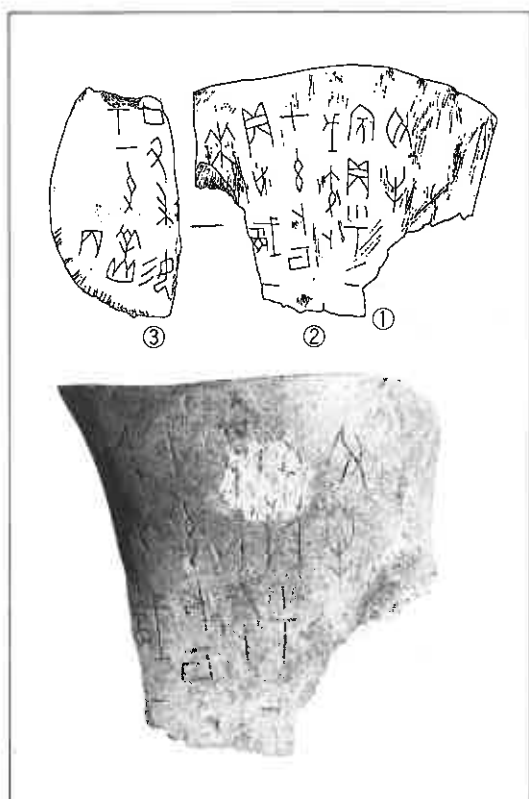
『史記』等に記載されていることが史実として確認され、殷代という王朝が実在したことが明らかとなったのである。また当時の政治・経済・社会文化等多くの組織制度機構が解明され古代史は変

貌したのであった。

「殷墟」であるとの伝えは漢代以前『史記』その他の文献の記載に見られるところである。関連遺物が発見されたのも宋の時代の『博古図録』に多くの古銅器が載せられている。この殷墟が著名になったのは1898年頃王懿榮、劉鉄雲によって卜骨が蒐集され、銘文が印刷物として世に出され、金石学者の羅振玉・玉国維が甲骨卜辞学として学問的研究を行ない解明されたことである。そしてこれらが契機となり1928年中華民国中央研究院に歴史語言研究所が設置され、所内に「考古組」が増設された。この研究所により殷墟が発掘調査され多大の遺物を発掘した。青銅器、甲骨、白陶土器、石製装飾品、また多量の人骨も発掘された。

本学の甲骨文字は昭和52

- | | | |
|-------------------|-----------------|----------------|
| ③ 丁丑骨形示一、
（左行） | ② 甲午卜、
（左行） | ① 戊寅卜、
（右行） |
| （左行） | 巨貞沚成来一、
（右行） | 賓貞、平取牛 |



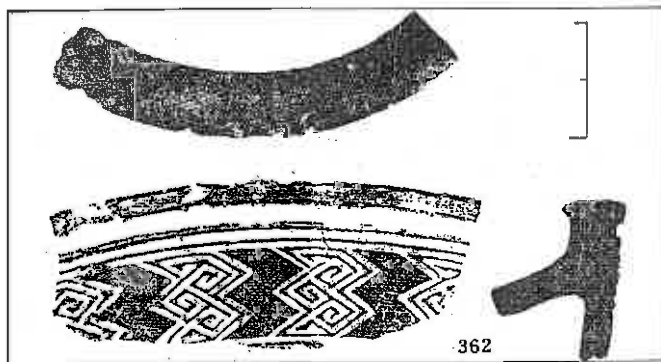
刻字甲骨（第1期）



殷墟 河南省安陽市西北小屯村の北部を東から西にみたところ



白陶土器片（殷墟出土）



白陶土器片拓本『本山考古室要録』より

年神戸大学伊藤道治教授に解説していただき史泉51号（昭和52年）に発表していただいた。これによると第1期10片、第2期8片、第5期4片である。これは京都「藤井有鄰館」所蔵の甲骨文字と時期が全く一致しており、1904年（明治37）安陽小屯村北の朱家所有地から盗掘された甲骨文字の一部であろう推測されている。そして本山彦一氏（元毎日新聞社長）がこれを入手されたのは明治末年から大正初期であったろうと推定されている。牛骨、亀腹甲、亀右脇甲、亀腹右腰甲などであり、銘文は祭祀類、風雨類、方国類、貞人類、雜類、旬夕類、田獵類などが刻されている。

写真の読み方は次の如くである。

- (1) 戊寅の日に卜い、賓が貞う、乎んで牛を取らしめんか。
- (2) 甲午の日に卜い、亘が貞う、沚或が来らんか。
- (3) 丁丑の日に帝紂が一戸を示せり、缶、内
乎は誅で召の意味のほか乎伐などの用例で討伐を意味することもある。

沚或は山西省中部にあった国で殷に服属していたと考えられ、来は来朝の意味。缶・内は管理責任者の署名であると考えられている。

（伊藤先生解説文より）

殷代（商代）遺物として特に著名なのが青銅器であり、我が国の博物館にも相当数所蔵展示されている。殷代の初期紀元前1600年ごろ小型の爵や鈴などが作られるようになる。そして紀元前1500年を過ぎると（商代中期）青銅器鑄造の技術は飛躍的に進み、大型の各種の器が鑄造されるようになったばかりでなく、金属の質も良く、光沢をもつようになってくる。青銅彝器（宗廟にそなえる重厚な器）と呼ばれるものである。食器としての鼎・鬲・甗・簋・酒器としての爵・觚・尊・香・卣・水器としての盤があった。そしてこれらの文様として饕餮文、竜文、といった怪獣の姿を具象化したものを画き神々の精霊に捧げる器とし、しばしば祭祀を行なったのである。実に殷代（商代）は祭祀の発達した時代だった。

またこれと同時代に白陶土器と呼ばれている白い陶器が出土している。この陶器は鉄分の少ない良質の陶土を用いて1100℃前後の温度で焼成し、白色土器とも呼ばれ、器形は青銅彝器の類に準じており、儀礼の為に作られたと考えられる。一般に大型、中型の墳墓から出土しているが、侯家荘の大墓や武官村の大墓から出土したものは有名である。器形は豆（高杯）、壺、有蓋盃、瓶形壺などが主で整美なものである。古銅容器と良く似た器形で装飾紋も同様なものが多い。本学の白陶土器片は細い線で螺旋線を構成したもので、雷文といわれるもので斜格雷文である。陶片の円周より推測計算すると直径17.8cmとなる。完形資料（下図参考品）の上部中央部分の小片であることがわかる。

殷代（商代）の一片の白陶片・甲骨片によりその時代が概観できる資料の好例である。



参考資料（完形資料）『安陽発掘』より

昭和62年度調査報告 「福岡・熊本」地方の遺跡

考古学等資料室所蔵の資料に関し、その出土地の確認などの調査を毎年実施しているが、昭和62年度は九州の福岡県・熊本県へ出張し、調査を行ったのでここに記しておきたい。

『本山考古室要録』（末永雅雄編・昭和10年）に九州地方の資料として筑前国、筑後国、豊後国、肥前国、肥後国、日向国、薩摩国、大隅国、などの資料が見られ、縄文、弥生時代の土器、石器あるいは古墳時代の須恵器が収録されている。これらの資料の大部分が本学へ移管されており、教育研究資料として活用されている。そこで62年度もこれらの出土遺跡の調査を行なうとともに、地方博物館施設について研修見学を行なった。9月5日から4日間文学部網干善教授のご指導と当該地方の教育委員会の方々及び担当技師のご案内により有意義に調査を進めた。

初日は福岡県糸島郡前原町を訪れた。前原町は魏志倭人伝に載る古代伊都国の中心地とされるところで、原始、古代より栄えた地域で、風光明媚な朝鮮半島との文化交流もあり、埋蔵文化財の豊富な町として知られる。また、文化財行政も進んだ地域でもある。前原町教育委員会河原吉美教育長及び社会教育課文化係長吉村耕治氏、同文化係主事岡部裕俊氏のご案内にて町内の遺跡及び「前原町立伊都歴史資料館」を見学した。

本学所蔵資料で福岡県糸島郡前原町高上古墳出土の「鹿角刀装具」が3点ある。これは昭和15年重要美術品に指定された資料で、前原町立伊都歴史資料館のオープン記念に貸出しを依頼され、展示中とのことであったので見学する。

この資料館は昭和62年7月25日オープンした町立の博物館施設で、敷地総面積は9,608㎡、建物面積は約1,200㎡、展示室は620㎡である。町立の博物館施設としては全国でも有数のものであろう。第一展示室には国指定史跡「平原遺跡」出土遺物が展示され、第二展示室には広田遺跡及び三雲南小路遺跡、志摩天神山貝塚出土資料及び糸島郡内出土の遺物が多数収集展示され、充実した博物館で、今後一層の充実が望まれると同時に地方文化に大きく寄与するものと期待される。本学貸出の鹿角刀装具も展示されている。（写真1）、これは鉄製刀剣の把縁、鞘口などに着装する鹿角製品で、直弧文を彫している。直弧文の構成は斜文帯を基幹として、その交点をめぐる渦状帯と、中心から外方へ放射状に向かう複数の放射状帯とからなっている。この資料の出土地を調査したのであるが、現在は畑地にされ、鶏舎が建っている附近が中心地であると説明を受けた。この地方でも多くの古墳が消滅していることを残念に思う。引続き周辺遺跡を岡部裕俊氏のご案内で調査し多大の成果を修めた。

翌日の9月6日は南へ下り八女市一帯の調査を行なった。八女市教育委員長坂田不二夫氏から埋蔵文化財についての概説をうけ、社会教育課（岩戸山歴史資料館）赤崎敏男氏のご案内にて岩戸山古墳へと向う。本学所蔵資料として岩戸山古墳出土の「石人」「石靱」片がある。（写真③）昭和15年9月27日付文部省の指定書が保存されている。

本山彦一殿 貴殿所有ノ左ノ物件本日昭和8年法律第43号重要美術品等ノ保存ニ関スル件第



①鹿角刀装具（福岡県糸島郡前原町出土）



②福岡県糸島郡前原町立伊都歴史資料館

2 條ノ規定ニ依リ認定セラレタリ 右通知ス
石人頭部 1 箇 石靱上半部 1 箇 福岡県八女市
吉田村出土

「石人・石靱」は墳墓や墳丘の表飾として用いられた石造彫刻で、他に人馬、鳥獣、武器武具、器材などがある。福岡県南部から熊本県と大分県東部の筑後、肥後、豊後地方と山陰（馬の 1 例のみ）から出土している。実物大の石像が相当数あり、この古墳近くに付設されている岩戸山歴史資料館にも大量に保管されており、本学の石人と同様のものがあり、当地で出土したものと確信した。岩戸山古墳は当地方最大規模の前方後円墳で、筑紫君磐井の墳墓とされる。現在の岩戸山古墳に石人・石馬等を復元し、墳丘が表飾され往時を偲ばせる。蒐集資料は資料館へ展示され見学者の研究教育に寄与されている。

その後八女市内の主な遺跡を見学した。石人山古墳、乗場古墳はどちらも前方後円墳であり、横穴式石室が開口し、装飾古墳である点類似している。石人山古墳の家形石棺に見事な直弧文の浮彫装飾がある。

八女茶は全国的に著名で、その茶畑の道を南へ下り「八女伝統工芸館」を見学する。この地方の手漉和紙製品、石工芸、竹工芸、木工芸等の製品が展示され、即売も行なわれている。その後地方の特色を生かした手漉和紙の工場を訪れ（松尾繁美工房）、見学させていただく。和紙業者は現在 17 軒ほど残っている。文禄年間（1592—1596）日蓮宗の日源上人が福井より伝えたといわれ、掛軸用裏打紙、版画和紙、提灯紙、書道用紙などの製品が漉き上っていた。ここにも伝統を守って、力強く生きておられる姿に感動した。

翌日の 9 月 7 日はさらに南へ下り熊本県内の遺跡を巡った。本学所蔵資料として菊池郡合志村、北合志村、清原村、護川村、泗水村、陣内村（旧名）などの縄文・弥生時代の土器石器等 100 点ばかりある。これはこの地方のご出身の坂本経堯氏寄贈の資料である。熊本県教育庁を訪れ、文化課長補佐林田敏嗣氏、隈昭志氏のご説明を伺い、担当者江本直氏（主任学芸員）のご案内にて調査に向った。熊本市より北東へ 30km 入る菊池郡一帯は農村の丘陵地帯で、古い遺跡はほとんど消滅しており、その跡と思われるところは畑地化していた。諸々の遺跡を巡り、泗水町歴史民俗資料館を訪れる。小規模ながら当地方の遺跡より採集及び発掘された石器、土器等が展示されている。ここで思わぬ発見をした。坂本経堯氏寄贈とある資料を見つけた。この坂本氏は前記のとおり本学所蔵資料を本山氏へ寄贈されたお方である。そこで坂本氏



③石靱上半部

石人頭部

（岩戸山古墳出土本学所蔵資料）



④岩戸山古墳（福岡県八女市大字吉田）

について諸々お聞きしたところ次のことが判明した。

坂本経堯氏は元菊池西部実業学校の教師をしておられ、同時に考古学者であった。県文化財専門委員、肥後考古学会長なども務められ、近代文化功労者として顕賞された方でもある。高木原遺跡発掘の際、本山彦一氏の金銭的な援助を受け、昭和 6 年 3 月本山氏が当地方を訪れた。その時に坂本氏が一緒に写った写真が地方誌に載っている。この事実からして本学所蔵資料はこの頃本山氏へ寄贈されたものと推測される。このお話を伺って実地の踏査が如何に必要であるかを痛感した。その後この周辺遺跡を巡り宿へと着いた。

最終日の 9 月 8 日は熊本県立美術館で開催されていた「古代エジプト展」を見学した。この美術館は昭和 51 年開館され、県民待望の美術館で熊本城内にあり、多くの観覧者でにぎわっている。特別展も過去 40 回行なわれその活動は活発である。

調査にご案内して下さった教育委員会の方々及び工房の方々にお礼申し上げます。〔角田 芳昭〕

◎資料利用状況

- 人物埴輪(埼玉県北埼玉郡上中条村出土) 2点
- 武人埴輪(茨城県東海村出土) 1点
- 人物埴輪(出土地不祥) 1点
- 昭和63年2月21日～昭和63年3月29日
- 池田市立歴史民俗資料館
- 第29回常設展「目で見る池田の歴史」展へ

- 人物埴輪(埼玉県北埼玉郡出土) 1点
- 昭和63年3月12日 埼玉県立さきたま資料館
- 「はにわ人の世界」展 展示図録へ

◎『関西大学考古学等資料室紀要』第5号目次

舎衛城と祇園精舎(覚書二)

(付日印共同学術調査彙報)	網干 善教
赤膚焼 奥田木白の陶法書	高橋 隆博
銅鐸の復元—兵庫県西宮市津門稻荷町出土銅鐸の復元—	合田 茂伸
研究ノート	
銘文からみた銅鏡の製作	千歳 竜彦
「桂甲の基礎的考察」	清水 和明
石器から鉄器へ	千喜良 淳
馬野繁蔵氏寄贈採集資料報告Ⅳ—瓦編〔1〕	考古学研究室
昭和62年度博物館実習総括	博物館学課程

編集後記

肝陵17号をここにお届けいたします。

今回は網干教授・上井教授の他に泉澄一教授、山岡泰造教授、非常勤講師米田文孝氏にお願い致しました。網干先生のインド学術調査報告は第14号より続いており、貴重な調査資料として残るものと考えられます。

山岡先生は関西大学100周年記念学術調査において隊員としてインドを度々訪問されており、今回はインド彫刻に関して一文を寄せられた。上井先生の民俗学に関するご研究も貴重な資料です。泉先生には韓国国史館について原稿をいただいた。博物館実習生の公文書コースの学生には非常に参考となるものである。米田文孝先生も隊員として発掘調査に従事されているヴェテランの研究者であり、15号に引続いて書いていただきました。

諸先生には感謝申し上げます。

考古学等資料室も移転して3年目、資料の充実と展示解説等徐々に進めております。

諸先生方の貴重なご意見をお寄せいただきますようお願いいたします。

表紙の写真は朝鮮民主主義人民共和国平壤郊外出土と伝えられる「軒丸瓦」(円瓦当)で蓮華文に草花文を配している。4世紀後半より5世紀にかけての資料である。同様の写真が「高句麗平壤府平川里出土」(『朝鮮瓦埴図譜Ⅱ』・昭和51年)とあるのでこの近郊の資料と推定される。大正11年(1922)本山彦一氏が朝鮮半島に旅行されているので、恐らくこの時に蒐集されたものと考えられる。上下

15cm

[角田 芳昭]